

2017年度卒塾生 向上心

2017年度卒塾生、昨年、彼女から来た年賀状にはこんな言葉が添えられていた。「春休みを楽しく過ごせるようにがんばります。みんなが想像できないくらいがんばります。」

その後の彼女はその言葉通り、みんなの想像をはるかに超える頑張りを見せた。4時間に及ぶ塾の冬季特訓の後、すぐさま自習室に移動して黙々と勉強を始める。他のことをやるのは1分でも惜しいと思っているのか、その後2、3時間残って夜の8時、9時になろうと、その間一切食べ物も口にしない。「前は空腹を感じていたけれど慣れました。」と、涼しい顔で言っていた。

彼女が入塾してきたのは中学部のスタートからほぼ1ヶ月遅れだった。“間違い直しなど、やるべきことをきちんとやること”—他の子と同じようにここから鍛え始めたが、彼女にとってはなかなか険しい道で、私に注意されることもたびたびあった。そんなにきっちりとした性分ではなかったのだ。しかも、問題を難なくパッパと解けるタイプでもない。ただ、人並み以上に彼女に備わっていたもの、それは並々ならぬ向上心だった。1年の終わり、「このままではダメだ」と発奮した彼女は自分を変えるべく頑張った。ためがちだった間違い直しも毎回丁寧に考えて直した結果、2年生に上がってからは私に注意をされることもほとんどなくなった。

努力の甲斐あって初めて学年3位をとった時、「頑張ったね。」と言った私に彼女は、「でも〇ちゃんや〇〇ちゃんたちとはまだ随分差があるので・・・。」と、にこりともせずと言った。〇〇ちゃんたちというのは同じ塾仲間で、さらに上位にいる二人のことである。“この子は今の自分に満足せず、まだ上を目指している”と驚かされたものだ。その後、とうとう1位をとった時にも反応は一緒だった。「今回は英語がうんとよかっただけで、まだ全然だめです。」と。

そんな彼女が目指した高校は、向陽高校の国際科学科だった。“将来への夢も努力次第でどこまでも広がるから”が理由である。ただ、偏差値の高い大変な難関で、定員はわずか40名。そこに、この年は93人が志望していた。何度もあきらめかけた。志望を下げようかと悩んだ。でも、あきらめられなかった。上に、上に・・・。自分の力を信じて、自分の可能性を信じて、残りの限られた時間を全て受験勉強に充てた。「仕事で疲れているのに毎回送り迎えしてもらったので、私は母のためにも絶対受かりたいんです。」と、こんな言葉も漏らしながら。

試験の結果、推薦合格者が12人いたので、実質、一般合格者は28人だった。今、夢へのスタートラインに立った彼女は、「せっかくチャンスを与えてもらえたんだから頑張ります。」と、さらに上の自分を目指してきっぱりと言い切り、その言葉通り毎日精一杯闘っている。